

大学考古学資料室について

森 浩 一

この度、大学新町校地、臨光館西隣の倉庫二階に新しく設けられた同志社大学考古学資料室(管理)大学文学部文化学科文化史学・考古学研究室―森浩一教授は、面積約一六〇㎡で、今春五月の開室以来、考古学研究者、歴史研究者陶芸作家など各方面からの熱心な来訪者が続き、学内利用者だけでもすでに六〇〇名を数えている。

以下は、この考古学資料室の誕生について森浩一文学部教授に語っていただいたものを編集部でまとめたものである。

歴史研究や歴史教育のための資料には、「文字による資料、つまり文献」と、遺跡や遺物といった、人間が残した「物質資料、つまり考古学資料」の二つがある。

戦前の歴史学は、どちらかというところ、主に文献によって研究を進めてきたわけだが、戦後の歴史学では、こうした、いわゆる物質資料に対する期待がたかまり、考古学の占める役割が大きくなるとともに、国や都道府県、さらには市町村や大学などにも考古博物館の

設置が盛んになってきている。文献は陳列するより、読んで理解するのに対して、物質資料は見たりに触れたりして理解をするものだという特色が強く、しかも「日常性」という親しさが数百年の差をこえて、現代人に伝わってくる点も歴史教育の基礎活動に資料の公開がしだいに常識化してきた原因である。

戦後、日本の歴史教育は変わったと言われる。しかし、歴史教育と密接な係わりがあるはずの従来からの博物館、とりわけ大きな博物館の中味自体はあまり変わっていないように思われる。たとえば、どのような資料を、どのような価値観によって陳列するかという原則は旧態依然たる所が多い。そこには、たしかに立派なもの、美しいもの、数少ないもの高価なものはあるけれども、歴史を動かした民衆の労働や生活は切りすてられていることが多く、また資料相互の関連性をその陳列にみることは少ない。中華人民共和国の博物館では新しい理念に支えられた陳列に徹しているが、博物館というものは、新しい理念がなければ意味がないばかりか、歴史教育に気付かない間に悪影響をあたえていることもよく見かける。

ところで、昨春から同志社にオープンした
大学文学部の考古学資料室は、同志社が、今
までに行った調査、発掘などによって集積さ
れてきた物質資料、さらに校友関係からの寄
贈をうけたもの、文学部予算の標本模型費で
特別に製作した資料などを学生諸君に見せ、
それを授業との関係で理解を深めさせ、同
時に、学外者にも公開したいという観点から誕
生したものである。

しかし、残念なのはなにぶんにも部屋が狭
いため、系統的な並べ方ができないのが悩
みの種だが、もう少し広くできれば、今までの
博物館や美術館などの、「きれいなもの」、
「高価なもの」を展示するというのではな
く、たとえば、農業、窯業、製鉄、製塩などの資
料を、技術史、産業史という流れで扱って
みたい。

それともう一つは同志社といえばキリス
ト教ということになるが、宗教を、キリス
ト教という面だけからみるのではなく、より
広い意味での宗教史——原始的な信仰に始
まっ、いろいろな宗教史——のデータ類
を並べたい。例えば、過日、南蛮寺跡を
発掘したときに出土したものでここ
で保管しているが、そ

ういうものを系統的に見ていけば、宗教史
に関する学生の理解の助けにもなること
と思ふ。

最近の学問の動向では、国文学も、宗教史
も、科学史なども、それぞれの研究には
こうした物質資料を無視することはでき
ないわけである。例えば源氏物語を理
解するためには、せめて、平安貴族や
庶民の日常の食器類ぐら
いはよく見ておく必要があるのではな
かろうか。学内にあっても、考古学
の役割を現代の水準で認識し、物
質的な資料で歴史を捉えて
いただく、いいかえれば人間を見
直すのにも必要ではな
かろうか。そして、一見その物
自身は美しくなくとも、それが持
っている学問的価値が、学生やこ
こを訪れる学外の人たち
に無限の可能性をひきだせ
そうなる遺物、そういうもの
を中心に公開して行きたい。
明治十年ごろのわが国で焼
かれた電気の碍子(岐阜県
出立など)は、普通の美術館
ではまず陳列しようもない
が、これなどは工学部の学
生もよく見てほしい。将来は、
この物質資料の資料館を、
同志社の特色にすることが
できればと考える
しだいである。

(付記) 展示、出土品の一部を紹介すると

縄文式土器、弥生式土器を始めとして、
須惠大甕(和歌山市井辺八幡山古墳、同

雨が谷一号墳出土)

埴質棺(五世紀、大阪府和泉市信太山出

土)

南蛮寺遺跡出土品(京都市中京区榊柳町

遺跡)

N.G. Munro の採集石器(佐伯義男氏寄

贈)

美濃焼の碍子(岐阜県出土)

若狭湾における製塩土器

木製人形(模型、六世紀、奈良県田原本

町石見遺跡出土)

京都南郊の新旧地図の比較(一八九〇—
一九七〇)などが展示されており、順次、所
蔵資料が展示されることになっている。

公開は、毎週火・金の午後一時から三時
三〇分まで(休暇中は休憩)。それ以外に特
別に見学を希望される場合は、文学部事務
室に連絡のこと。